

## 日本語のオソロシイ／コワイと 朝鮮語の *tulyopta/musopta* について

深 見 兼 孝

### 1. 研究の目的

「恐怖」を表す代表的な形容詞として、日本語ではオソロシイ／コワイが、朝鮮語では *tulyopta/musopta* が挙げられよう<sup>1)</sup>。オソロシイ／コワイと *tulyopta/musopta* が各々どのような意味特徴によって区別され、また、それが日本語と朝鮮語でどのように異なっているかを明らかにすることが本稿の目的である。

### 2. 先行研究と問題点

便宜上、類型、構文、意味の観点から、先行研究を概観する。

#### 2-1 類型

寺村(1982:139-154)は「コトの類型」に「感情表現」を置き、それを「感情の直接的表出」と「感情的品定め」を含む4つの「小類型」に区分している。この二つの類型は、述語が形容詞であり「感情的品定め」は外側に「属性規定」とつながるとしている。オソロシイとコワイに関しては、前者が「感情の直接的表出」を担う「感情形容詞」としても「感情的品定め」を表す「感情的性状規定の形容詞」としても用いられる傾向があるのに対し、後者は「感情形容詞」に限定される傾向にあると見ているようだ<sup>2)</sup>。西尾(1972)はコワイを「感情と属性の両面を持つ語(西尾1972:35)」とし、西尾(1993)は寺村(1982)の「小類型」を評価している。オソロシイとコワイがどのくらい性状の意味合いを帯びるかは程度の差なのであろう。

一方、유현경(1988)は現代朝鮮語の形容詞を「客観形容詞」と「主観形容詞」に大別し、「客観形容詞」の1類型として「性状形容詞」を、「主観形容詞」の1類型として「心理形容詞」を設定している。유현경(1988)によれば、*tulyopta* は「心理形容詞」の一種である「対象心理形容詞」であり(유현경1998:54-69, 78-80)、*musopta* は「対象心理形容詞」としても「性状形容詞」としても使用されるという(유현경1998:36, 136-138)。

#### 2-2 構文

寺村(1982)によれば、日本語の「感情の直接的表出」は「感情主(X)ガ(まれにXニ)……対象(Y)ガ～」、「感情的品定め」は「品定めの対象(X)ガ……(基準(Y)に)～」という構文を取る(「～」に、述語である形容詞が入る)。一方、유현경(1998)は

朝鮮語の「心理形容詞」は「経験主-ka....対象-ka」という構文を取り(유현경1998:81)、経験主をマークする -kaは-ekeと交代しうるとしている(유현경1998:54-69)。

寺村(1982)は、例文から察するに「感情主」はハで表示されるのが通常と考えているようであり、유현경(1998)も「経験主」は主題の-nunはで表示されるのが普通としている。また、二はやりもらいの相手を示しうるが、-ekeも本来与格助詞で、やりもらいの相手を示す。したがって、オソロシイ/コワイとtulyoŋpta/musoŋptaは並行的な構文を形成し、両語語間の名称の違いに関わらず、各々の助詞が表示する名詞の役割も並行していると言える。実際、유현경(1998)のいう「性状形容詞」としてのmusoŋptaの構文は、寺村(1982)のいう「感情的品定め」の構文と並行している。

### 2-3 意味

オソロシイ/コワイについては森田(1977:131-132,205-206)、tulyoŋpta/musoŋptaについては임흥빈(1993:206,290)の記述を見てみる。

まず、恐怖を感じる対象だが、オソロシイが特定の対象(自分を圧倒するほどの力、自分に危害を加える心配のあるもの、不幸な結果を招きそうな状況)であるのに対し、コワイは特定の対象に対しても、ある状況・場面に対して(あるいはそれに接して)も抱く感情であるという。tulyoŋptaとmusoŋptaについては直接的な記述がなかったが、前者は心理的状态に焦点があり、後者は対象自体の持つ性質を表すものであるという。

次に、恐怖の内容だが、オソロシイは身がすくみ逃げたくなる気分、臨場的な恐怖感、恐怖からくる戦慄を表し、コワイは脅威や危険を覚えることを表すという。また、オソロシイは、経験主が抵抗することのできないほど弱い立場にあることを表し、コワイはうまく処理したり解消するすべがなく、避けられない立場にあることを表すという。そして、コワイは危険度の高い、または危険性のある状況に至るまでをカバーするという。

一方、tulyoŋptaは自身を危うくしないか、自身に悪いことが起きないかという不安を感じる状態を指し、musoŋptaは自己の存在に危険を与えるかもしれない対象に恐怖を感じる状態、あるいは、その正体が分からなくて恐怖を感じる状態を指すという。

### 2-4 問題提起

以上の先行研究から、1)オソロシイとコワイは、性状的意味を帯びる程度に差があり、オソロシイのほうがその程度が高く、tulyoŋptaとmusoŋptaも性状的意味を帯びる程度に差があり、musoŋptaのほうがその程度が高い、ということが推測される。また、コワイについては経験主自身の立場、musoŋptaは対象に対する経験主の判断、オソロシイはその両方が記述されているが、tulyoŋptaにはそのような記述がない。ここから、2)経験主の判断という点で、tulyoŋptaとそれ以外は異なっているのではないかと推測される。とりわけ、コワイとmusoŋptaには「危険」という、ある程度性状的な性質を表す言葉が用いられていることから、3)両者の近さが推測される。しかし同時に、オソロシイには「戦慄」、tulyoŋptaには「不安」という、まったく感情的な言葉が用いられていることも注目される。

次に、日本の小説とその朝鮮語訳からオソロシイ/コワイがどのように翻訳されている

かを見る<sup>3)</sup>。その結果が次の表である。

オソロシイ/コワイとtulyopta/musoptaの対応状況 (カッコ内は実数)

	musopta	tulyopta	その他	計
おそろしい	27.5 (56)	6.4(13)	9.3(19)	43.1 (88)
こわい	50.0(102)	2.9 (6)	3.9 (8)	56.9(116)
計	77.5(158)	9.3(19)	13.2(27)	100.0(204)

表から、オリジナルにおけるオソロシイとコワイの出現頻度の差に比べ、翻訳に現れたtulyoptaとmusoptaの出現頻度が極端に異なっており、musoptaの出現頻度の方が圧倒的に高いことがわかる。また、オソロシイもコワイもmusoptaとの親和性の方が遙かに高いが、コワイの方がその傾向が強い。1)には符合しないが、2)と3)に符合しよう。

以上の先行研究や翻訳の様相から推測されることを合理的に説明するのが、次の課題である。

### 3. 対象

恐怖の対象はモノでもコトでもありうる。順に見ていく。

#### 3-1 モノ

(1a)のコワイは、「ぼく」がキリン一般に対し抱いている恐怖であるが、それはその時々を感じられた恐怖から一般化されたものである。その恐怖はキリンの姿形、様子や行動など(あるいはその時々得た知識)から、「ぼく」に害をなすかもしれないと判断した結果である。しかも、姿形、様子や行動といったものは、キリンの個体によって違うし、同じ個体でもその時々で異なる個別的なものである。同時に、あくまでも外面であり、部分でしかない。コワイは、このような、対象の個別性、外面性、部分性に依存した恐怖である。これに対し、(2a)のオソロシイは、直接的には特定時点の夏枝の行動や様子(オソロシイの経験主である陽子は夏枝に首を絞められた)から引き起こされた恐怖だが、キライという他の感情との対比選択が行われている。つまり、キライよりオソロシイというのがより適切な感情だと判断しているのである。他の感情との対比選択ができる感情は、対象の外面に依存する度合いの少ない感情であるにちがいない<sup>4)</sup>。

(1a)ぼくは困って言いました。「ぼくは、キリンてやつ、とても恐いんだよ。」

(1b)na-num nanchoheso "na-num kilin-i-lan, nom corjmal musow-o." (壁06412/18712)

1代-主題 困る・接 1代-主題 きりん-叙述-引用冠 奴 本当に MUS-終

(2a)夏枝を、きらいというより、ただ恐ろしかった。

(2b)nassue-ka silocot-ta-ki-pota-num taman musow-ot-ta. (氷点25218/22418)

夏枝-主 嫌いになる・過去-引用-名-比較-主題 ただ MUS-過去-終

オソロシイの対象が～トイウコト(ノ)ハによって導入され、述語が～モノダで終わることがある。(3a)は文末の「のか」を除けばこの文型に該当する。

(3a) 闇というのは—これ程畏しいものだったのか？

(3b) otum-i-lanun kos-un — ilokhe musou-n kos-i-ot-tonka? (姑獲鳥の夏40907/42017)

闇-叙述-引用冠 形名-主題 こんなに MUS-冠 形名-叙述-過去-回想疑問

「～トイウコト（ノ）ハ……モノダ」という文型は、特定の部類（ここでは「闇」）を取り立て、特定の属性（ここではオソロシイ）がその部類を包括的かつ恒常的に特徴づけることを述べるものであろう。これはオソロシイという感情が、本来対象の個別性や外面性、部分性への依存度の少ない感情であることを示している。

コワイには(2a)や(3a)に該当する例がなかった。また、先行研究でオソロシイの意味説明に「戦慄」という言葉が使われていたが、直観的にもオソロシイの方がコワイより、強く深い恐怖であると感じられる。これは、オソロシイがコワイに比べ対象の外面性や部分性に依存しない感情であることに帰することができるだろう。

ここで、(3a)では対象（闇）の属性をオソロシイという感情で規定しているが、これはオソロシイという感情を対象へ投影していることに他ならない。オソロシイもコワイも対象に対する一定の判断があるので、両者は性状的意味合いを帯びる。しかし、コワイに(3a)に該当する例がないところから見て、オソロシイの方が感情の対象への投影の度合いが高く、その分性状的意味合いが強くなる傾向があると言えよう。対象の外面や部分に依存した恐怖（コワイ）より、その依存度の低い恐怖（オソロシイ）の方が性状的意味合いが強くなる傾向があるというのは矛盾しているようだが、対象の外面性や部分性に依存した恐怖は対象へ投影する余地がないのではないだろうか<sup>9</sup>。

一方、musoptaは(2b)のように他の感情との比較選択にも用いられ、(3b)のように日本語と並行的な構文も作るが、tulyoptaは同様な例が見当たらなかった。一見、tulyopta/musoptaはオソロシイ/コワイと並行しているように見える。

### 3-2 コト

オソロシイのコト的对象を導入する形式は次のようにいくつかがある。(4a)は「～コト」によって、(5a)は間接疑問の形で、(6a)は「～ノ」によって導入されている。

(4a) 私は、彼女と並んで街を歩くだけで充足しているのだから、なおさら彼女の軀に触れることがおそろしかった。

(4b) na-nun kunyo-wa nalani koli-luul kon-nun kon-man-ulo mancokhe iss-ot-ki ttemun-e,

1代-主題 3代-共同 並んで 街-対 歩く-冠 形名-限定-具 満足する-副 いる-過去-名ため処

ku isanj kunyo-e mom-e son-uil te-nun kos-i musow-ot-ta. (鳥獣虫魚43811/01716)

その 以上 3代-属 体-処 手-対 当てる-冠 形名-主 MUS-過去-終

(5a) 夏枝がどのような反応を示すか恐ろしかった。

(5b) nassue-ka otton panun-uil poi-lci tulyow-ot-ton kos-i-ta. (氷点07814/07904)

夏枝-主 どんな 反応-対 見せる-疑 TUL-過去-冠 形名-叙述-終

(6a) [……あなた、ごらんになって。かわいい赤ちゃんですわ。] 啓造は椅子にすわったまま、煙草

をふかしていた。] 佐石の子をみるのが恐ろしかった。

(6b)[...yɔpo, ikot com pwayo . yeppu-n eki-yeyo ." keicoo-nun uica-e anc-aso

間投 これ ちよっと 見る・命令 可愛い・冠 赤ちゃん・叙述・終 啓造・主題 椅子・処 座る・接

tampe-lul phiu-ko iss-ot-ta.] saisi-e casik-uul po-nun kos-i tulyow-ot-ta. (氷点14218/13221)

たばこ・対 吸う・副 いる・過去・終 佐石・属 子供・対 見る・冠 形名・主 TUL-過去・終

これに対し、コワイのコトの対象は、(7a)のように専ら「～ノ」によって導入され、制約が大きい。(8a)のように「～コト」によって導入されることもあるが、この1例のみであった。

(7a)私は、いつもいつも「おばあちゃんが死ぬのが」こわかった。

(7b)na-nun nul <halmoni-ka cuŋ-nun ke (<kos-i)> musow-ot-ta. (キッチン02916/02918)

1代・主題 いつも 祖母・主 死ぬ・冠 形名・主 MUS-過去・終

(8a)夜眠ることがなによりこわかった。

(8b)muot-pota pam-i-myon camtul-ki-ka musow-ot-ta. (キッチン15202/14612)

何・比較 夜・叙述・条件 眠る・名・主 MUS-過去・終

コトの対象が「～ノ」で導入される(6a)と(7a)のうち、少なくとも(6a)のコトの対象はその時その場所のみに限定される出来事で、それに対する恐怖を言っている<sup>7)</sup>。これに対し、コトの対象が「～コト」で導入される(4a)と(8a)では、そのコトの対象は個々の出来事ではない。時間や場所に拘束されない、一般化された事象である。コワイのコトの対象が専ら「～ノ」で導入され、「～コト」で導入された例が一個しか見つからなかったのは、コワイが対象の個別性に依存する度合いの強い恐怖であることを意味する。逆に、オソロシイは対象の個別性に依存する度合いの弱い恐怖ということになり、基本的に3-1での考察の結果と合致する。

一方、tulyoptaは(6b)のように日本語で「～ノ」に対応する例しか見られなかった。これに対し、musoptaは「～コト」((4b), (8b))と「～ノ」((7b))の両方に対応する例が見える。ここでも一見、オソロシイ/コワイとtulyopta/musoptaがほぼ並行しているように見える。しかし、3-1や3-2でtulyoptaに当該の例が見られなかったのは、単にtulyoptaの例がもともと極めて少ないせいかもしれない。tulyoptaよりmusoptaの方が、性状的意味を帯びやすいのは事実だろうが、ここまでは、tulyopta/musoptaが対象の個別性や外面性、部分性に関連するかどうかの判断は保留しておくのが妥当だろう。

#### 4. 状況

恐怖の感情が生まれる状況について見てみる。

##### 4-1 想像

tulyoptaがコト的事態を対象とした恐怖であるとき、その事態がまだ生じてないことがある。(9)では啓造は佐石の子をまだ見てはいないし、(10)でも一日はまだ終わっていない。

(9a=6a)[…あなた、ごらんになって。かわいい赤ちゃんですわ。」啓造は椅子にすわったまま、煙草をふかしていた。] 佐石の子をみるのが恐ろしかった。

(9b=6b)[...yɔpo, ikɔt com pwayo . yeppu-n eki-yeyo ." keicoo-nun uica-e anc-aso  
 間投 これ ちよっと 見る-命令 可愛い-冠 赤ちゃん-叙述-終 啓造-主題 椅子-処 座る-接

tampe-lul phiu-ko iss-ɔt-ta.] saisi-e casik-ul po-nun kɔs-i tulyɔw-ɔt-ta.  
 たばこ-対 吸う-副 いる-過去-終 佐石-属 子供-対 見る-冠 形名-主 TUL-過去-終

(10a)そして中でも、それは終わるのがこわいくらい完璧な一日だった。

(10b)kuucɔŋ-eso-to kumal-un kkunna-nun ke (<kɔs-i) tulyɔu-l cɔŋto-lo wanpyokha-n  
 その中-処-添加 その日-主題 終わる-冠 形名-主 TUL-冠 程度-具 完璧だ-冠

halu-yɔt-ta. (キッチン17805/17209)  
 一日-叙述-過去-終

次の(11)では、啓造があると思っていることは啓造の想像であって、実際にある訳ではない。  
 (12)でも、期待はしていない。

(11a)たしかにそこにあるはずの海が見えないということ、そのようなことが、自分の人生にも、あ  
 るように思えて、啓造はそれが恐ろしかった。

(11b)punmyɔŋhi kɔki iss-ɔya ha-l pata-ka poi-ci an-nun ku-wa pisurtha-n il-i cakī  
 確かに そこ ある-必須条件 する-冠 海-主 見える-否定-冠 それ-共同 似ている-冠 こと-主 自分

inseŋ-e-to in-nun kɔt kath-a keicoo-nun kuukɔs-i tulyɔw-ɔt-ta. (氷点36801/31905)  
 人生-処-添加 ある-冠 形名 同じだ-接 啓造-主題 それ-主 TUL-過去-終

(12a)きちんと説明さえすれば、みかげは帰らずにここに来てくれるかもしれない。とりあえず話を  
 聞いてくれることもありうる。そんな幸福を考えて期待するのがこわかった。

(12b)cetelo cal solmyɔŋha-myɔn mikhake-ka yɔki iss-ɔcu-lci-to molu-nta, iltan-nun  
 きちんと よく 説明する-条件 みかげ-主 ここ いる-副与える-疑-添加 知らない-終 いったん-主題

yeki-lul tul-ɔcu-l su-to iss-ul kɔs-i-ta. kuɔlɔn henpokha-n kite-lul kan-nun ke (<kɔs-i)  
 話-対 聞く-副与える-冠 形名-添加 ある-冠 形名-叙述-終 そんな 幸福だ-冠 期待-対 持つ-冠 形名-主

tulyɔw-ɔt-ci. (キッチン08909/08620)  
 TUL-過去-終

以上の例では、すべてある事態を想像し、その想像された事態に対しtulyɔptaと言っている。  
 次もまた同様である。

(13a)それは、(もし、パパとママが、凄く怒って、ロッキーを捨てたり、よそにやったりしたら、  
 どうしよう)ということだった。トットちゃんにとって、なによりも、それは、悲しくて、こわいこ  
 とだった。

(13b)(hoksilato appa-wa ɔmma-ka nomu hwa-ka nasɔ lokhi-lul netapoli-nta-kɔna, talu-n  
 もしも お父さん-共同 お母さん-主 あまりにも 怒る-接 ロッキー-対 捨てる-引用-選択 異なる-冠

cip-e cwɔ poli-myɔn ɔtɔkha-ci....) kuukɔs-un thothe-hanthe-nun muɔt-pota-to sulphu-ko

tulyou-n il-i-ot-ta. (窓ぎわのトットちゃん14906/11814)

TUL-冠 こと-叙述-過去-終

これに対し、musoptaのコト的对象は(14)のように現実のこともあるし、(15)のように想像であるところもある。

(14a)いざとなると勝気な満佐子は、深夜の道をこうして行くことが、願掛けという目的もあって、それほど怖ろしいわけではない。

(14b)il-e putitchi-myon nam-eke ci-nun kos-ul siloha-nun masakko-nun, kiph-tun

こと-処 ぶつかる-条件 他人-与 負ける-冠 形名-対 嫌う-冠 満佐子-主題 深い-冠

pamkoli-lul ilokhe koloka-nun kos-i soman-ul pi-nun mokcok-to it-ko heso kwtaci musou-n

夜の街-対 このように 歩く-冠 形名-主 望み-対 祈る-冠 目的-添加 ある-接 する-接 それほど MUS-冠

kos-un ani-ta. (橋づくし32608/09916)

形名-主題 否定叙述-終

(15a=4a)私は、彼女と並んで街を歩くだけで充足しているのだから、なおさら彼女の軀に触れることがおそろしかった。

(15b=4b)na-nun kunyo-wa nalani koli-lul kon-nun kon-man-ulo mancokhe iss-ot-ki

1代-主題 3代-共同 並んで 街-対 歩く-冠 形名-限定-具 満足する-副 いる-過去-名

ttemun-e,ku isaj kunyo-e mom-e son-ul te-nun kos-i musow-ot-ta.

ため-処 その 以上 3代-属 体-処 手-対 当てる-冠 形名-主 MUS-過去-終

逆に、tulyoptaのコト的对象が現実である例はなかった。一方、オソロシイは対象が現実のこと((14))もあるし想像のこと((9), (11), (15))もあるが、コワイのコト的对象が現実である例は見当たらない。

## 4-2 突発

tulyoptaは想定外の事態に遭遇して起こる感情のことがある。夏枝は、(16)では自分が村井を引きとめる気持ちが起こることを想定してはいなかったし、(17)では誘惑を感じることを想定していなかった。したがって、tulyoptaという感情も夏枝にとって突発的に起こったものである。

(16a)夏枝は村井を送りに出なかった。引きとめてしまいそうな自分が恐ろしかった。

(16b)nassue-nun mulai-lul consorjha-lo naka-ci an-at-ta. mot ka-ke cap-ul tuutha-n

夏枝-主題 村井-対 見送る-目的 出る-否定-過去-終 不可能 行く-副 捕まえる-冠 らしい/ようだ-冠

çaki casin-i tulyow-ot-ton kos-i-ta. (氷点01413/02503)

自分 自身-主 TUL-過去-冠 形名-叙述-終

(17a)さらに旅行をやめて、啓造の留守に、夫を裏切りたいような誘惑もかんじた。夏枝は自分が恐ろしくなった。

(17b) kuiliko yohen-ul kuman tu-ko keicoo-ka om-num tojan-e namphyon-ul pepanha-ko  
 そして 旅行-対 止める-接 啓造-主 いない-冠 問-処 夫-対 裏切る-副

siph-um yuhok-to nuukyot-ta. nassue-num caci casin-i tulyow-ot-ta. (氷点33418/29117)  
 たい-冠 誘惑-添加 感じる-過去-終 夏枝-主題 自分 自身-主 TUL-過去-終

(18)では副詞kapcakiが示すようにtulyoptaは突然起こった感情である。

(18a)死ねないと思った時、死がにわかに恐ろしくなった。

(18b) itelo cuk-ul su-num op-tako senkakhess-ul tte, kapcaki cuk-um-i tulyow-ot-ta.  
 このまま 死ぬ-冠 形名-主題 ない-引用 思う-完了-冠 時 突然 死ぬ-名-主 TUL-過去-終

(氷点36318/31516)

以上の例ではtulyoptaは突発的な恐怖を表すと言えよう。しかし、musoptaが突発的な恐怖を表す、明確な例はなかった。一方、突発的な恐怖ではコワイの例がなかった。

さて、突発的は恐怖はいわば心に浮かんだままの恐怖で、認知の上では理性の処理を受けていないだろう。また、想像とともに浮かぶ恐怖は、理性の処理を受けてはいるが、その程度は低いだろう。したがって、データで見る限り、tulyoptaが理性の処理を受けないままの恐怖と理性の処理の程度の低い恐怖を表すのに対し、musoptaは理性の処理の程度の高い恐怖と処理の程度の低い恐怖を表す、と言える。また、相対的に理性の処理程度の高いmusoptaの方が、性状的意味を帯びやすい。しかし、オソロシイ/コワイは、オソロシイが理性の処理程度の高い恐怖も低い恐怖も未処理の恐怖も表し、コワイは処理度の低い恐怖のみを表す、ということになり、性状的意味の帯びやすさと整合性が取れない。やはり、オソロシイ/コワイは認知上の処理とは異なった区別があるのであろう。逆に、tulyopta/musoptaを対象の個別性、外面性、部分性で説明しようとする、なぜオソロシイ/コワイのような整合性のない形にならないか、説明がつかないだろう。

## 5. まとめ

データの範囲内で導かれる結論は次のようである：1) オソロシイ/コワイの区別は対象の個別性、外面性、部分性に依存する程度による。一方、2) tulyopta/musoptaの区別は認知上の理性の処理程度による。

このように、tulyopta/musoptaは、理性の処理を通すかどうかという認知上異なった次元の違いを反映しているのに対し、オソロシイ/コワイはその意味での認知上の次元の差は反映していない。むしろ、対象の個別性、外面性、部分性という、状況(=対象)依存的な性質を反映している。日本語の状況依存的な性質は、よく英語との比較で日本文化の反映とされてきたものだが、朝鮮語との比較でも同じことが言えるかどうか興味あるところである。他の感情形容詞や推量表現についても調べて見る必要があるだろう。

## 注

1) 恐怖を表す動詞としては、日本語にはオソレル、オソロシガル、コワガルなどがあるが、



根源的な動詞としては、オソレルだけであろう。また、*tulyopta/musopta*は歴史的には動詞からの派生であるが、現代ではそれらの動詞は古語に属し、*tulyopta/musopta*から形成された動詞が用いられている。現代語としては、まず形容詞を扱うことは理に適っていると思われる。

2) 寺村(1982)は、コワイを「感情形容詞」と「感情的性状規定の形容詞」の両用としているが、「感情の直接表出」を担う形容詞としてオソロシイとコワイを挙げる一方、「感情的品定め」の形容詞としてはオソロシイだけを挙げ、コワイを挙げていない。

3) 以下のものを使用した。筆者が使った版と初版の年が違う場合は両方を示した。また、用例もこれらから採用した。

安部公房『壁』新潮文庫あ4-2、新潮社2005年/1969年[서병조 「벽」 :서병조 「하얀 사람 외」 문예춘추사1999年]

石原慎太郎『完全な遊戯』新潮文庫(草)119C、新潮社1978年/1960年[申東漢 「完全한 遊戯」 : 日本短篇文學全集Ⅵ」新太陽社1974年]

遠藤周作『白い人』:小田切進(編)『日本の短編小説 昭和(下)』潮文庫97D、潮出版社1977年/1973年[서병조 「하얀 사람」 :서병조 「하얀 사람 외」 문예춘추사1999年]

大江健三郎『飼育』:大江健三郎『死者の奢り・飼育』新潮文庫お-9-1、新潮社2004年/1959年[서병조 「사육」 :서병조 「하얀 사람 외」 문예춘추사1999年]

開高健『裸の王様』:開高健『パニック・裸の王様』新潮文庫か-5-1、新潮社2004年/1960年[서병조 「벌거벗은 왕」 :서병조 「하얀 사람 외」 문예춘추사1999年]

北杜夫『天井裏の子供たち』新潮文庫(草)131N、新潮社1979年/1975年[李柱訓 「天障 속의 少年들」 : 「日本短篇文學全集Ⅵ」新太陽社1974年]

京極夏彦『姑獲鳥の夏』講談社文庫き $\frac{39}{1}$ 、講談社2005年/1998年[김소연 「우부메의 여름」 손안의책2005年/2004年]

黒柳徹子『窓ぎわのトットちゃん』講談社文庫く $\frac{10}{1}$ 、講談社2004年/1984年[김난주 「창가의 토토」 프로메테우스 출판사2002年/2000年]

小松左京『日本沈没(上)』光文社文庫こ21-1、光文社2000年/1995年[이정희 「일본침몰 上」 미래사1995年/1992年]

筒井康隆『文学部唯野教授』岩波書店1990年[김유곤 「다다노 교수의 반란」 문학사상사1996年]

松本清張『1年半待て』:『松本清張短編総集』講談社1971年[表文台 「一年半 기다려 주세요」 : 「日本短篇文學全集Ⅴ」新太陽社1974年]

三浦綾子『氷点(上)』角川文庫5025(み5-3)、角川書店1998年/1982年[최현 「빙점(上)」 범우사르비아문고27, 범우사1989年/1981年]

三島由紀夫『橋づくし』:小田切進(編)『日本の短編小説 昭和(下)』潮文庫97D、

潮出版社1977年/1973年[関丙山「踏橋」：日本短篇文學全集Ⅵ] 新太陽社1974年]  
 村上春樹『海辺のカフカ(上)』新潮文庫む-5-24、新潮社2006年/2005年[김춘미「해변의 카프카」 문학사상사2006年/2003年]  
 夢枕獯『陰陽師 飛天ノ巻』文春文庫ゆ24、文藝春秋1998年[김소연「음양사2 비천편」 손안의책2004年/2003年]  
 吉本ばなな『キッチン』角川文庫10713(よ11-8)、角川書店2007年/1998年[김난주「키친」 민음사2006年/1999年]  
 吉行淳之介『鳥獸虫魚』：小田切進(編)『日本の短編小説 昭和(下)』潮文庫97D、潮出版社1977年/1973年[吳成鎮「鳥獸蟲魚」：「日本短篇文學全集Ⅵ」新太陽社1974年]

4) 朝鮮語の形態分析に用いた略語は以下の通りである。また、*tulyopta*と*musopta*の語幹は、環境によって末音が変化するので、形態分析の中ではTUL, MUSとしている。

引用冠：引用冠形詞形、冠：冠形詞形、感：感嘆形、間投：間投詞、疑：疑問形、共：共同格、強：強調形、具：具格、形名：形式名詞、主：主格、終：終結形、処：処格、叙述：叙述語幹、接：接続形、属：属格、对：对格、副：副詞形、複：複数形、与：与格、名：名詞形、1代：1人称代名詞、3代：3人称代名詞

また、( )内に、‘／’の左にオリジナルの、右に翻訳の該当箇所を五桁の数字で示した。最初の三桁がページ、次の二桁が行である。斜字は下段であることを示す。

5) オソロシイの方がコワイより性状的意味を帯びるという点では、シク活用とク活用の意味的類別は、オソロシイ(シク活用)とコワイ(ク活用)には当てはまらないが、コワイが対象の属性(我々が直接知覚できるのはモノの外側である)に依存するという点では、コワイはク活用の意味的特徴を残していることになる。また、よく知られているように、サムイとツメタイ(どちらもク活用)の区別にも外面性や部分性(全体性)という特徴が関わっているという議論があるが、感情と感覚の類似性を垣間見るようで興味深い。

6) 例文中の [ ] は状況を示したものである。

7) 例(7a)も祖母が死ぬ場面を想像するたびに起こる恐怖を言っていると解釈できる。

## 言及した文献

- 寺村秀夫(1982)『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』くろしお出版。  
 西尾寅弥(1972)『形容詞の意味・用法の記述的研究』国立国語研究所。秀英出版。  
 西尾寅弥(1993)「喜び・楽しみのことば」『日本語学』第12巻第1号。pp.14-22。  
 森田良行(1977)『基礎日本語1』角川書店。  
 유현경(1998)국어 형용사 연구. 한국문화사。  
 임홍빈(1993)뉘앙스 풀이를 겸한 우리말 사전. 아카데미하우스。